

平安京左京三条四坊十町跡

2004年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平安京左京三条四坊十町跡

2004年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生きています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来1200年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じて広く公開することで市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用をはかっていきたいと願っています。

研究所では、平成13年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平方メートルから、数千平方メートルにおよぶ大規模調査までありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび消防用防火槽設置工事に伴う平安京跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げます。

平成16年9月

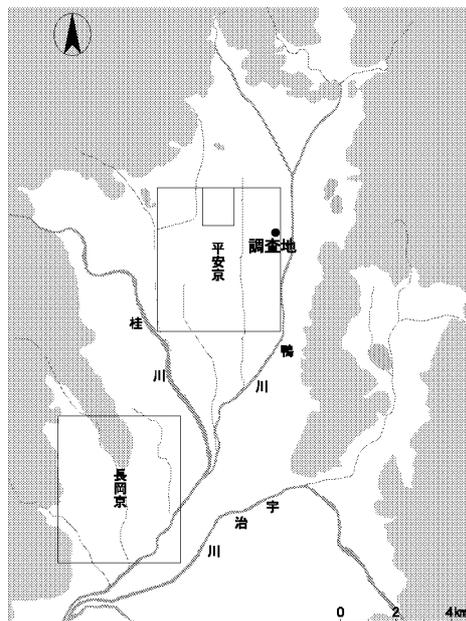
財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 平安京左京三条四坊十町跡・烏丸御池遺跡
- 2 調査所在地 京都市中京区御池通富小路西入東八幡町88（元柳池中学校）
- 3 委 託 者 京都市代表者 京都市長 梶本頼兼
- 4 調査期間 2004年5月21日～2004年7月9日
- 5 調査面積 100m²
- 6 調査担当者 尾藤德行
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「三条大橋」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 日本測地系（改正前）平面直角座標系（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用基準点 京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点（一級基準点）を使用した。
- 11 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 12 遺構番号 通し番号を付し、遺構種類を前に付けた。
- 13 遺物番号 挿図の土器類、銭貨、骨・角製品、金属製品、石製品の順に通し番号を付した。
- 14 掲載写真 村井伸也・幸明綾子
- 15 遺物復元 村上 勉・出水みゆき
- 16 基準点測量 宮原健吾
- 17 本書作成 尾藤德行
- 18 編集・調整 児玉光世・大立目 一

（調査地点図）



目 次

1 . 調査経過	1
2 . 遺跡の位置と環境	1
3 . 遺 構	3
(1) 基本土層と遺構の概要	3
(2) 第1面の遺構	4
(3) 第2面の遺構	7
(4) 第3面の遺構	7
(5) 第4面の遺構	9
(6) 第5面の遺構	10
4 . 遺 物	10
(1) 遺物の概要	10
(2) 土器類	10
(3) その他の遺物	16
1) 銭貨	16
2) 骨・角製品	16
3) 金属製品	16
4) 石製品	18
5 . ま と め	18

図 版 目 次

図版 1	遺構	1	第1面全景(北から)
		2	第2面全景(北から)
図版 2	遺構	1	第3面全景(北から)
		2	第4面全景(西から)
図版 3	遺構	1	第5面全景(北から)
		2	北壁断面(南西から)
図版 4	遺構	1	第1面井戸SE6・7(西から)
		2	第3面南北柱列・溝SD60(北から)
		3	第4面井戸SE86(南から)
		4	第5面流路SD152(北西から)

図版5 遺物 室町時代・江戸時代の土器類

図版6 遺物 その他の遺物

挿 図 目 次

図1	調査前風景（南から）	1
図2	作業風景	1
図3	調査位置図（1：2,500）	2
図4	北壁断面図（1：100）	3
図5	井戸SE6平面図（1：50）	4
図6	室SX2実測図（1：50）	4
図7	井戸SE7実測図（1：50）	5
図8	第1面・第2面遺構平面図（1：100）	6
図9	SX59実測図（1：50）	7
図10	南北柱列実測図（1：100）	7
図11	第3面・第4面遺構平面図（1：100）	8
図12	井戸SE86実測図（1：50）	9
図13	第5面遺構平面図（1：100）	9
図14	平安時代・室町時代の土器類実測図（1：4）	11
図15	江戸時代前期の土器類実測図（1：4、71・75のみ1：8）	13
図16	江戸時代後期の土器類実測図（1：4）	14
図17	銭貨拓影（1：1）	16
図18	その他の遺物実測図（1：2）	17
図19	調査位置図と四行八門推定線（1：1,000）	19

表 目 次

表1	遺構概要表	5
表2	遺物概要表	12

平安京左京三条四坊十町跡

1 . 調査経過

京都市中京区御池通富小路西入東八幡町に所在する元京都市立柳池中学校敷地内で、校舎および複合施設の新築・整備事業の一環として、京都市消防局により、敷地の南東部に耐震性防火水槽の設置が計画された。当地は烏丸御池遺跡・平安京跡にあたることから、京都市埋蔵文化財調査センターの指導により、発掘調査を実施することになった。当敷地内での調査は第3次調査となる(図3)。

発掘調査は、消防局の立ち会いの下、調査区位置の確定後、舗装のアスファルト切断工事を行い、2004年5月24日から遺構調査を開始した。重機により舗装のアスファルト撤去後、表土削平を地表下1mまで行い、中央の近代の井戸や焼け瓦の多い部分を掘削した。現地表面は北西角で標高42.8mを測り、南東側に低くなっている。北東部分は遺構の残存状況がよく、上記近代の井戸断面の土層観察から、おおよその遺構検出面を便宜的に、第1面から第5面に分けて、順次掘り下げ、調査を行った。各調査面で、写真撮影と図面の記録をとるとともに、遺物を採集し、最後に断割り調査により下層の堆積状況を確認した。その後、埋め戻しと復旧作業をし、7月9日には全て終了した。

2 . 遺跡の位置と環境

調査地は、烏丸御池遺跡・平安京跡にあっている。烏丸御池遺跡は、平安京造営以前の縄文時代から飛鳥時代にわたる集落遺跡で、これまでの調査で竪穴住居や流路などの遺構や縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器などの遺物が採集されている。また、調査地は、平安時代には平安京左京三条四坊十町にあたり、『拾芥抄』には平安時代中期に右大臣藤原定方の「中西殿(山井西殿)」が存在したとされ、鎌倉時代には善法院があったとされる。桃山時代には豊臣秀吉の京都



図1 調査前風景(南から)



図2 作業風景

改造に伴い富小路が現在の位置に造り替えられ、現状の地割が出来上がった。江戸時代には町屋の中に含まれ、1637年の『洛中絵図』には「八幡東横丁」、1686年の『新選増補京大絵図』では、調査地のある一町の東半分には「平野藤次」の屋敷が記されている。

2003年8月から発掘調査中の京都御池中学校建て替えに伴う第2次調査では、古墳時代の流路、平安時代後期の柱穴・溝・土壌、鎌倉時代から室町時代の柱穴・土壌・井戸、江戸時代の土壌・井戸・石室、炉跡を含む工房跡を検出している。また、敷地中央部南端の第1次調査（1979年）でも、同様の遺構・遺物を検出した。さらに、当地80m南で実施されたマンション建設に伴う発掘調査¹⁾では、古墳時代の湿地や平安時代から鎌倉時代の土壌・柱穴・井戸など、室町時代の土壌、江戸時代の土壌・溝・井戸などを検出している。さらに調査地周辺の立会調査では中世から近世の遺構や平安時代前期から後期および鎌倉時代前期の土壌や包含層、鎌倉時代の井戸や包含層を検出している。

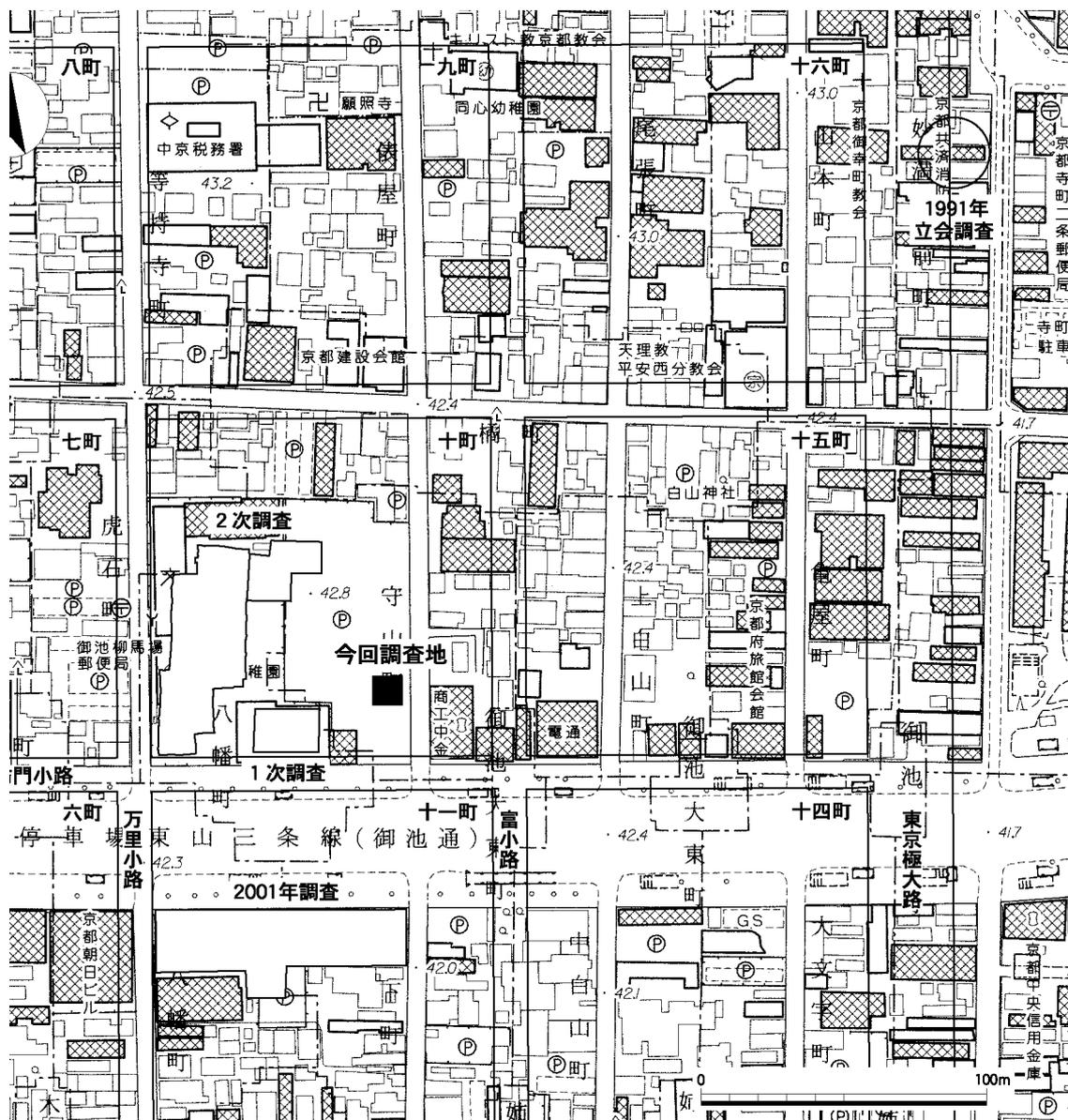


図3 調査位置図 (1 : 2,500)

3. 遺 構

(1) 基本土層と遺構の概要

基本土層(図4)

現地表面は北西角で標高42.8mで南東側に低くなっている。全体に、攪乱部分が多いが、北東部分は残存状況がよく、中央部で検出した近代の井戸断面から、およその遺構検出面は第1面を41.5m、第2面を41.2m、第3面を40.8m、第4面を40.5m、第5面を40.0mとして設定した。

遺構の概要

調査の結果、第1面では、江戸時代後期や前期の石組み井戸2基、室1基、甕をすえた遺構2基などを検出した。第2面では、江戸時代前期の土壇や柱穴、北西部では1m四方の石組み遺構を検出した。第3面では、室町時代の石組み東西溝を検出し、東側では南北柵列の柱穴を4間分検出し、その東側で南北溝を検出した。第4面では、平安時代末期の井戸や平安時代後期の土壇などを検出した。第5面では、古墳時代の流路を検出し、埋土から土師器甕の体部が出土した。検出した遺構総数は159基になる。なお、各遺構および遺物の時期の判定は、平安京・京都²⁾期～²⁾戡期の編年案を準用する。

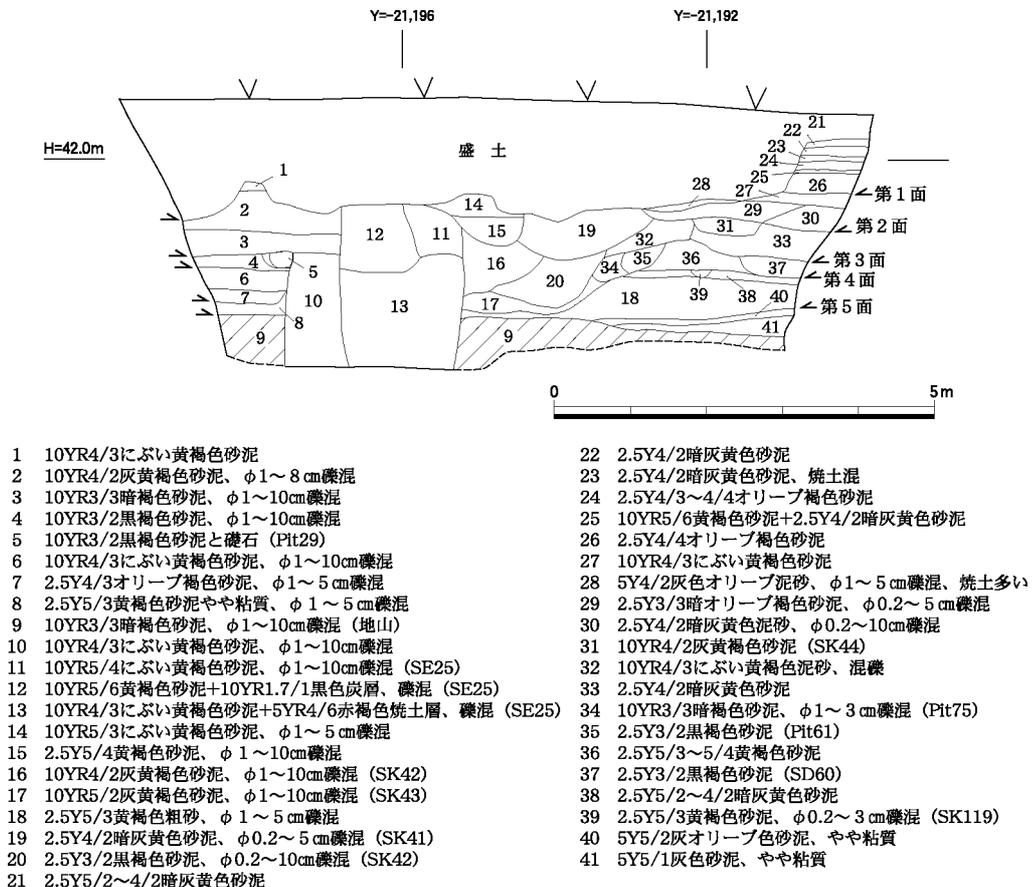


図4 北壁断面図(1:100)

(1) 第 1 面の遺構 (図 8、図版 1)

第 1 面では、江戸時代後期から前期の遺構を検出した。

井戸SE 5 直径0.7m、深さ3.5mで、底面の標高は38.0mである。底部には 6 枚の埴が半円形に並んで残っていた。埋土はほとんどが直径10cm大の礫であるが、埴の破片も出土しており、もとは埴積みの井戸であり、井戸を埋める際に埴は取り外し、栗石で埋めたものとする。江戸時代後期の 期新 (19世紀) の遺物が出土している。

井戸SE 6 (図 5、図版 4) 石組井戸で、掘形の直径1.3m、深さ2.5m、石組内径0.6mである。底面の標高は38.5mである。遺物は少なく、詳細は不明確であるが、江戸時代後期の井戸SE 5 に切られており、より古い時期と考える。

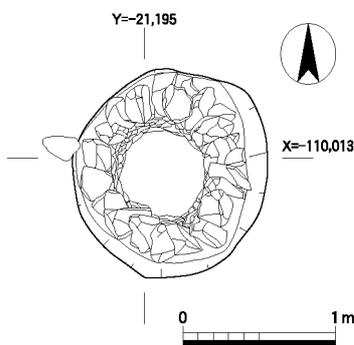


図 5 井戸SE 6 平面図 (1 : 50)

井戸SE25 深さ2.75mの井戸であるが、北壁が崩壊のおそれがあるため完掘していない。埋土は、炭・焼土・焼け瓦で、石組や埴などの井戸枠材は出土していない。井戸を埋める際に、再利用するため材を抜き取ったものと考えられる。埋土からは、江戸時代後期の 期新 ~ 期 (18世紀) の遺物が出土した。

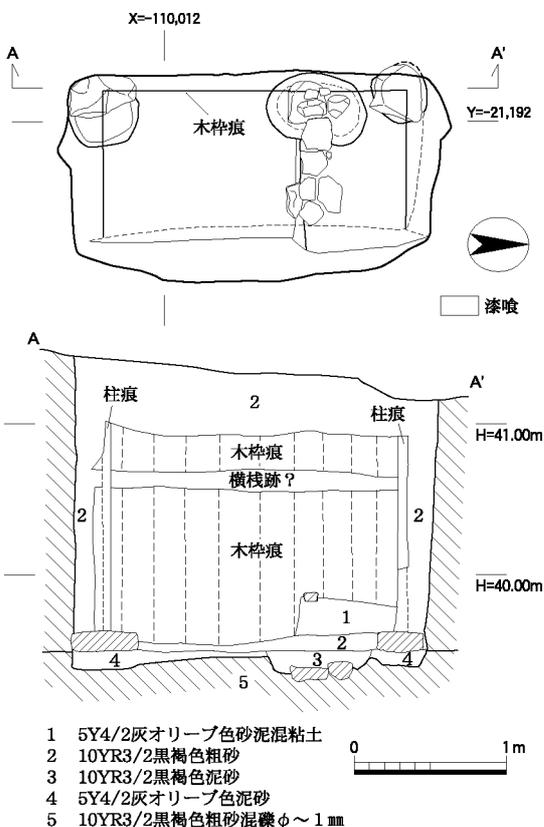


図 6 室SX 2 実測図 (1 : 50)

室SX 2 (図 6) 掘形は南北2.5m、東西1.3m以上で、東壁側は調査区外に続き、深さは約2.0mである。西壁下で礎石を

3基検出した。調査時に南と北の礎石上には柱の痕跡と思われる空洞が南北 2 m の間隔で確認できた。埋土の西壁には南北1.9m・高さ1.3m、南壁には東西約1.0m・高さ1.3mの材木の痕跡がある。室の壁を木材で押さえていたものと考えられる。壁板は痕跡で、縦板か横板か不明確であるが、西壁では礎石から 1 m 上にて、南北1.9 m・上下幅0.15mで木材の痕跡のない部分があり、この部分を横棧部分とすると縦板組の室の可能性はある。室の埋土の上層 2 / 3 は焼土・焼け瓦で、江戸時代後期の 期新 (19世紀) の遺物が出土した。

SX 3 南北1.8m・東西1.2m以上で南東の調査区外へ続く。深さは、約 2 m である。埋土はほとんどが焼土と焼け瓦である。陶器や磁器などが出土しているが、江戸時代後期の室SX 2 と同時期と考える。

井戸SE7（図7、図版4） 石組井戸で、掘形の直径約1.5m、深さ2.9m、石組内径は一辺約0.6～0.7mの隅丸方形である。標高38.3mの底部には10cm大の石を並べ、その下には一辺0.65m四方の木枠痕跡が西辺以外の3辺に残っている。標高37.6mの底部中央からは完形の信楽播鉢が出土した。木枠の痕跡は最初の井戸の水溜施設で、後に底ざらえをしたものとする。播鉢は傾いており、据えたものとは考えにくい。底部からは江戸時代前期の

期古（17世紀末～18世紀初）の土師器や白磁碗や天目碗などが出土した。播鉢は 期（17世紀前半）頃の古いものである。

土壌SK11・12 信楽の甕を据えた遺構である。SK11は掘形の直径は0.45m、深さ0.18m、小ぶり器壁の薄い甕の底部が残存していた。この土壌の南0.7mで検出したSK12は、掘形の直径0.55m、深さ0.3mで、器壁の厚い大きめの甕の底部が残存していた。これらは南北に並び、甕の残存直径は0.4mと0.5mである。SK11はほとんど遺物がなく、SK12は甕の内側底部に江戸時代前期の

期新（17世紀末）の遺物が多くみられた。底部を掘り込み固定して使用していた甕の釉は薄く、透湿性がある。甕内面には付着物が見られなかったが、小と大の便所甕として使用していたとも考えられる。

土壌SK15 東西2.0m、南北0.6mの遺構である。室SX2に削られており、江戸時代前期の期（17世紀前半）の遺物が出土している。ここで出土した半裁した碗は、SX2で出土した碗と割れ口が一致した。SX2を掘削するときSK15にあった碗の片方がSX2の基礎に混入したものであろう。

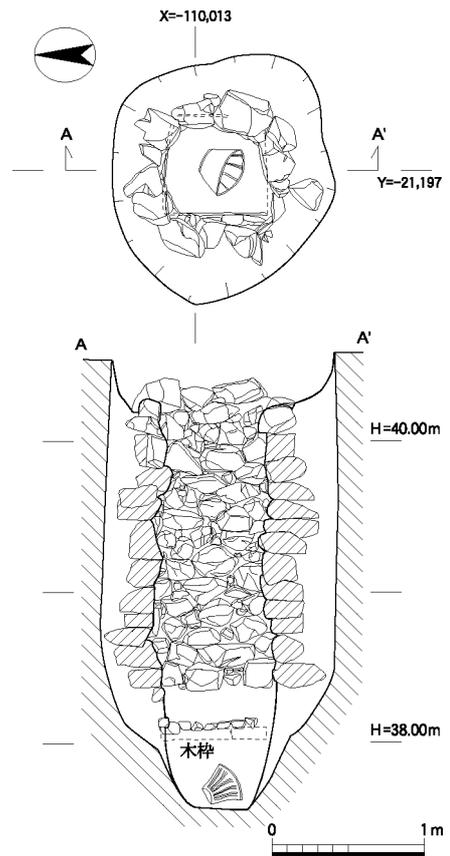


図7 井戸SE7実測図（1：50）

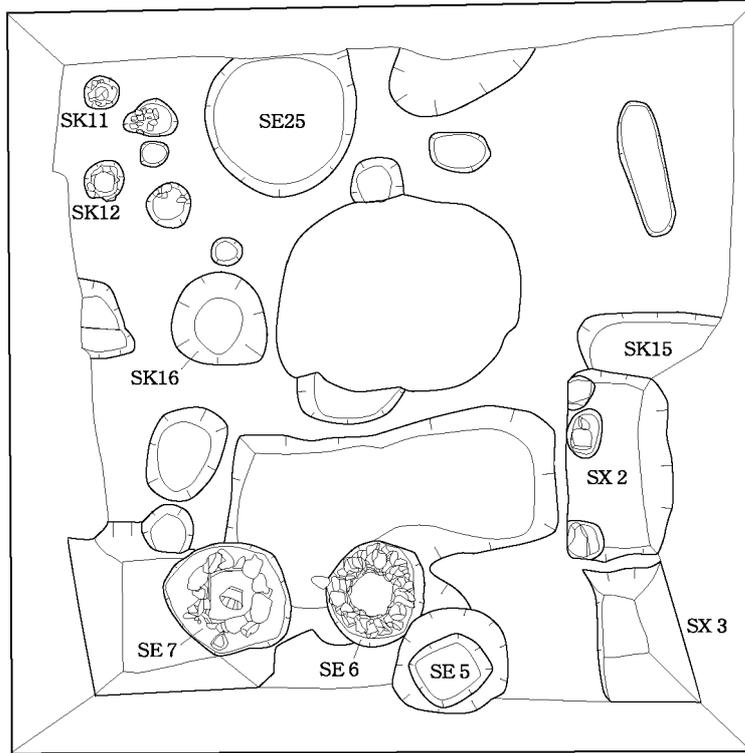
表1 遺構概要表

時代	遺構
江戸時代後期	井戸SE5・6・25、室SX2、SX3、土壌、柱穴など
江戸時代前期	井戸SE7、土壌SK11・12・15・48・51、石組SX59など
室町時代	溝SD60・69、南北柱列（柱穴Pit61・62・76・65）、土壌SK68・78・88など
平安時代	井戸SE86、土壌SK112・123・124、柱穴など
古墳時代	流路SD152、杭跡など

第1面

Y=-21,196

Y=-21,192



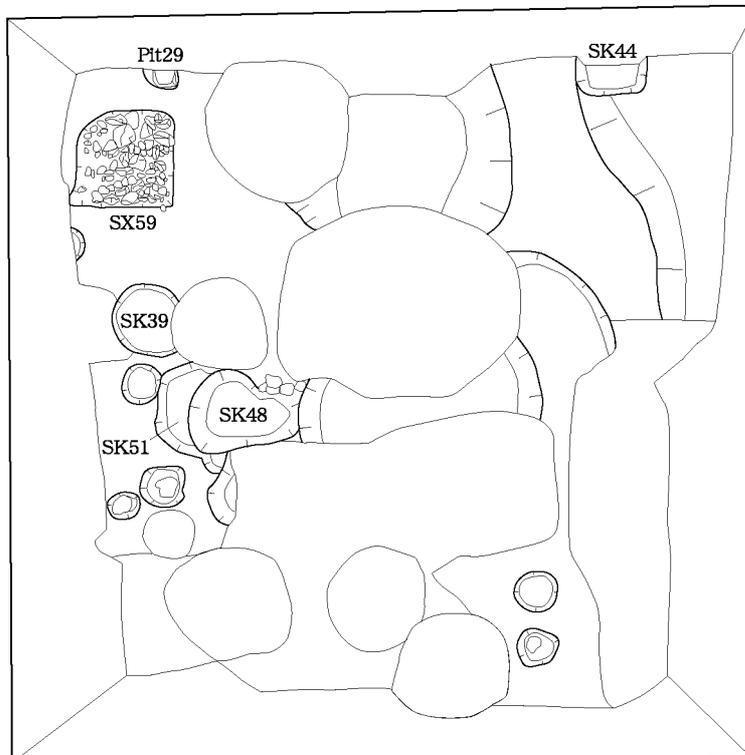
X=-110,008

X=-110,012

第2面

Y=-21,196

Y=-21,192



X=-110,008

X=-110,012



图8 第1面・第2面遺構平面図(1:100)

(3) 第 2 面の遺構 (図 8、図版 1)

第 2 面では主に江戸時代前期の遺構を検出した。

SX59 (図 9) 一辺 1 m の石組遺構で、直径 10 ~ 30 cm 大の石を積み上げており、底面は 40 cm 大の石を並べている。掘形の底面は深さ 0.6 m であった。遺物は少なく、上面で江戸時代、底面で室町時代の遺物が出土した。何らかの基礎として築いたものとする。

その他に土壌 SK48・51 などがあり、柱穴には礎石の残るものもあるが、建物として復元はできなかった。SK48・51 から江戸時代前期の 期の遺物が出土した。

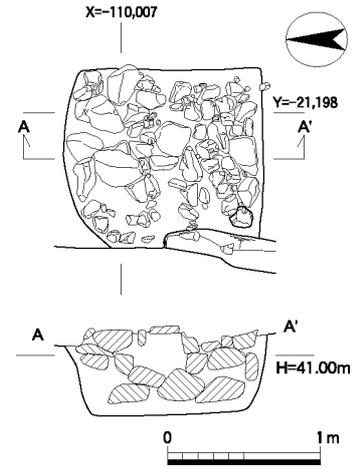


図 9 SX59 実測図 (1 : 50)

(4) 第 3 面の遺構 (図 11、図版 2)

第 3 面では室町時代の遺構を検出した。

溝 SD60 (図 10、図版 4) 南北方向の溝で、南北長 8 m 残存し、南半は室 SX 2 などによって削平されている。幅は 2 m 以上で、東肩部は調査区外にある。深さは 0.3 m で、埋土から室町時代の遺物が出土した。

南北柱列 (図 10、図版 4) 溝 SD60 の西 1 m 前後で検出した。柱穴 Pit61・62・76・65 の 4 基が約 1.8 m 間隔で南北に並び、根石が残る。柱列は、北で約 8 度西へ振れている。Pit76 と Pit65 の間にもう 1 基が存在していたと考えられるが、削平されている。また、Pit76 以外はそれぞれ西隣に古い Pit75・63・72 が残り、建て替えられたと考える。埋土からは鎌倉時代から室町時代の遺物が出土した。これらは SD60 の西側に並んでおり、SD60 と関連した遺構と考える。

溝 SD69 東西方向の石組み溝である。東西 1.2 m 以上、幅 1.0 m、内法 0.3 m、深さ 0.2 m で、一辺 30 ~ 50 cm の石を組んで作られている。東側の石組みは残っていないが、掘形は東西 2.6 m 検出した。埋土から、室町時代後期の 期新 (15 世紀末) の遺物が出土した。

第 3 面を一部掘り下げて遺構検出をしたところ、溝 SD69 の下層から土壌 SK68・88 などを出した。SK68 は直径約 0.8 m、深さ 1.6 m、SK88 は直径 2 m、深さ 0.6 m で、溝 SD69 より古い 期古 (15 世紀中頃) の遺物が出土した。また、鎌倉時代の遺物が少量混入していた。

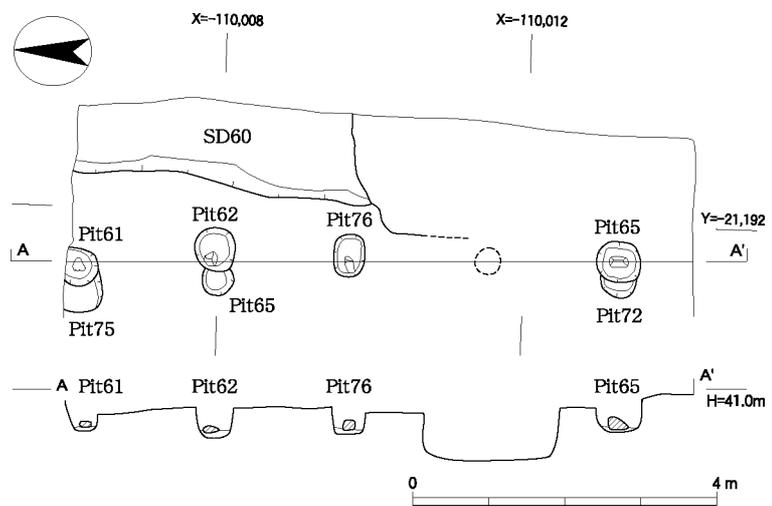
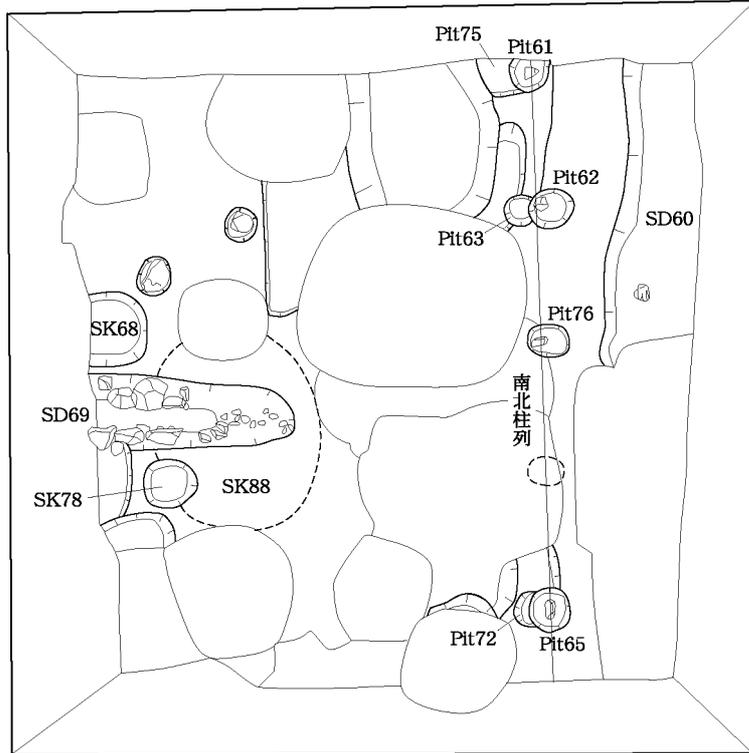


図 10 南北柱列実測図 (1 : 100)

第3面

Y=-21,196

Y=-21,192



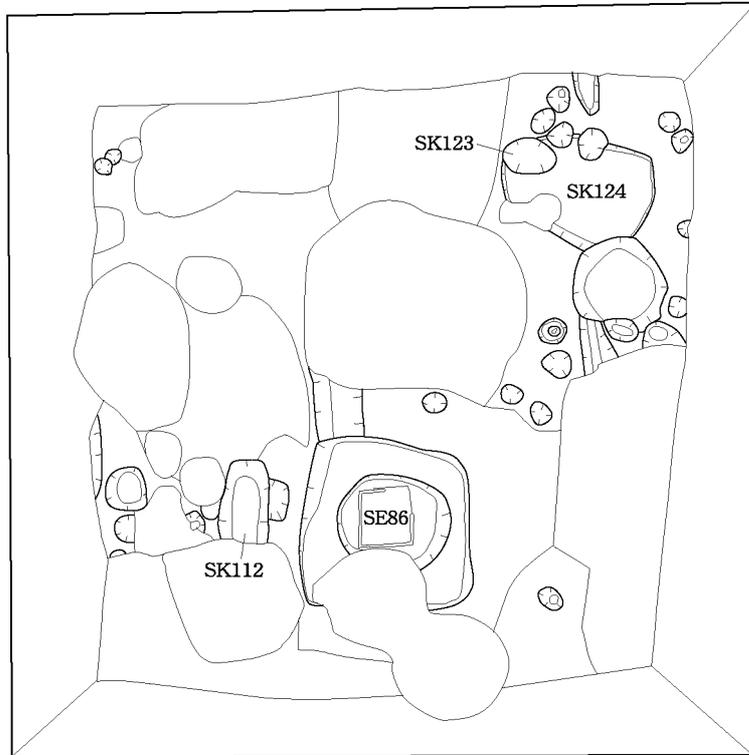
X=-110,008

X=-110,012

第4面

Y=-21,196

Y=-21,192



X=-110,008

X=-110,012



图11 第3面·第4面遺構平面図(1:100)

(5) 第4面の遺構(図11、図版2)

第4面では、北東部と南西部での遺構残存状況は良好で、平安時代の遺構を検出した。

20数基の柱穴・土壌などを検出したが、建物などに復元はできなかった。

井戸SE86(図12、図版4) 調査区南で検出した。掘形は約2m四方、井戸枠は約0.7m四方の横棧組みの井戸である。残存状態が悪く、検出面から1.3mで木枠の痕跡がみられ、横棧の痕跡が底面で残存していた。木枠は上で西側に傾いていた。検出面から1.3m掘り下げるまで木枠の痕跡が検出できなかったのは、木枠の材を抜き取ったためと考えられる。井戸底面は、標高38.6mである。埋土から平安時代末期の期新(12世紀後半)の遺物が出土した。

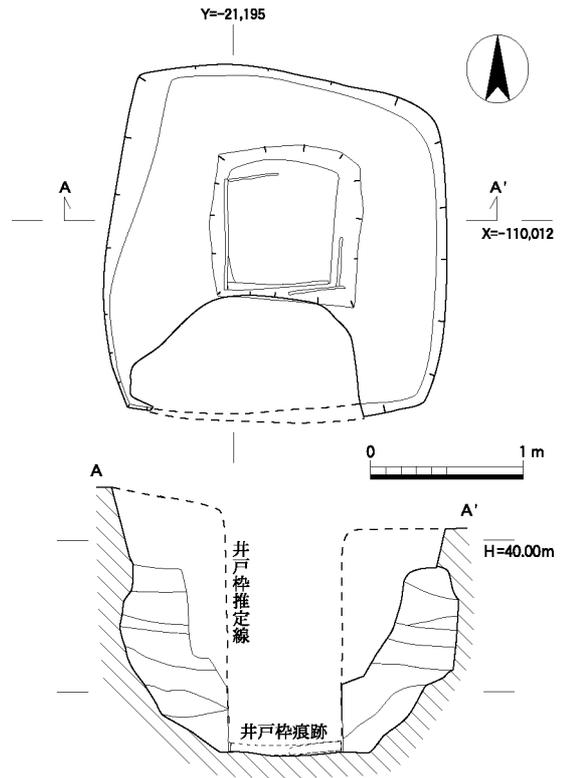


図12 井戸SE86実測図(1:50)

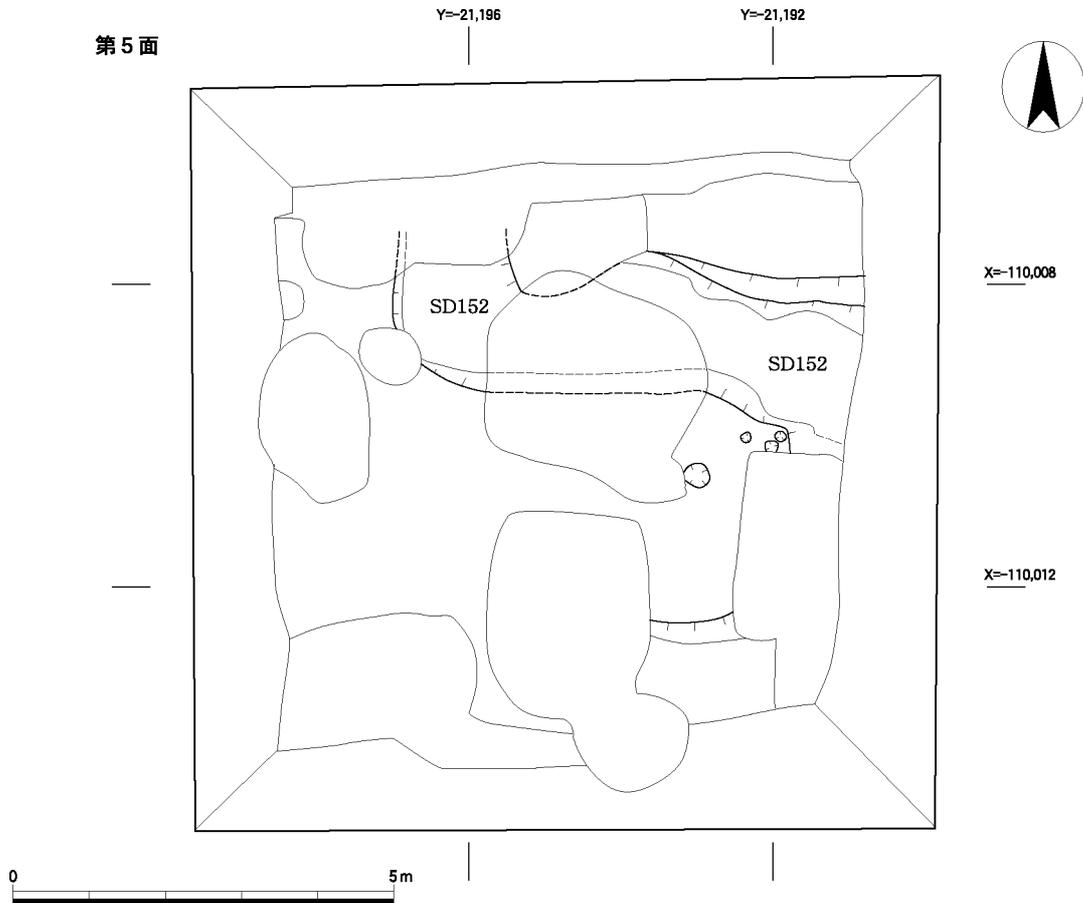


図13 第5面遺構平面図(1:100)

土壌SK112・123・124などからは平安時代中期から後期の 期新～ 期の遺物が出土した。

第4面の下層で、主に北東部で平安時代の柱穴や土壌などを検出した。少量の平安時代中期頃の遺物が出土した。

(6) 第5面の遺構(図13、図版3)

流路SD152(図版4) 古墳時代の流路で、幅約1.5m、残存する深さは東壁で0.5mで、底面の高低差から北西から南東に蛇行して流れていたと考える。埋土から、甕体部の破片が出土した。流路の底面はこぶし大の礫層や砂層が互層堆積となっている。南肩には、4基の杭跡状の遺構を検出し、磨滅した遺物が少量出土した。また、南側で土壌を検出した。

4. 遺物

(1) 遺物の概要

出土遺物は土器類が大部分を占め、他の遺物は少ない。調査では、第1面から第5面でそれぞれ遺物が出土したが、新しい時代の遺構の埋土に、古い時代の遺物が混入している。全体で41箱あり、遺物の内訳は、江戸時代後期以降の遺物が20箱、江戸時代前期が15箱、室町時代と鎌倉時代が5箱、平安時代と古墳時代で1箱で、鎌倉時代以前の遺物は少ない。

以下、遺構ごとに時期をおって遺物の内容を述べる。

(2) 土器類

平安時代(図14)

土壌SK112 土師器、須恵器、緑釉陶器が出土している。 期新～ 期古(11世紀前半)に属する。土師器皿(1・2)は、ともに薄手で1/5残存する。口縁部は外反し端部を上方に収める。1は小型で口径11.2cm、高さ1.3cmである。2は中型で口径14.0cm、高さ1.8cmである。ともに磨滅がみられる。

井戸SE86 土師器、須恵器、緑釉陶器、白磁、青磁、瓦が出土している。土師器皿(3)は、厚手で、平安時代末期のV期新に属する。

土壌SK124 土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦が出土している。黒色土器椀(4)は、口径13.0cm、高さ4.4cm。内面と口縁部の外面が黒色のA類である。内面はヘラミガキする。底面外面には漆が付着しており、パレットとして使用したようである。

土壌SK123 土師器、灰釉陶器が出土している。土師器は11世紀頃に属する。灰釉陶器皿(5・6)はともに1/5残存する。5は口径14.1cm、高さ3.1cmあり、内面の中央部は釉がかからない。 期中(9世紀前半)に属する。6は口径15.0cm、高さ2.3cmあり、内面は全面に釉がかかる。 期新(8世紀後半)に属する。

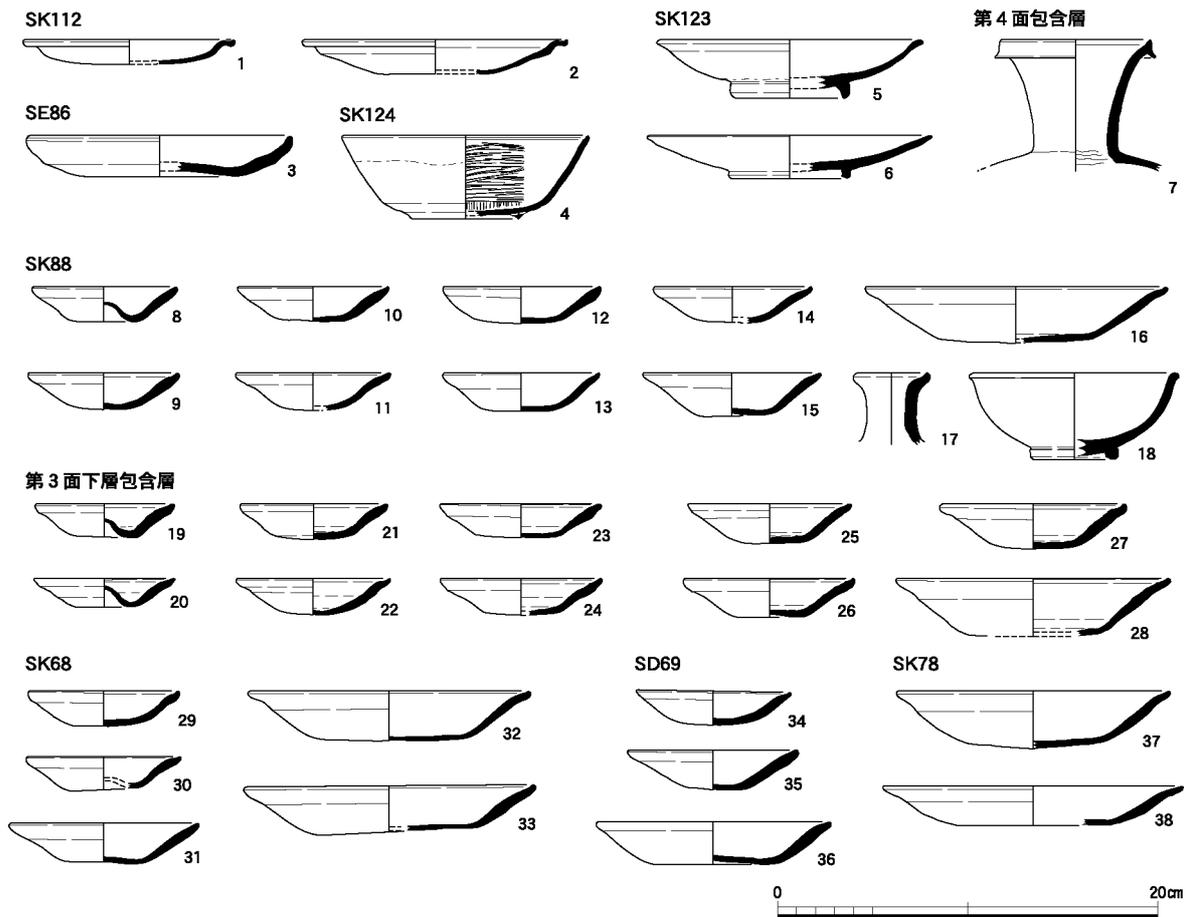


図14 平安時代・室町時代の土器類実測図(1:4)

第4面包含層 土師器、須恵器、灰釉陶器、瓦が出土している。土師器は平安時代後期に属する。須恵器壺(7)は口頸部の破片で、口径8.5cm、高さは7.5cmまで残存する。期新～期古(9世紀前半)に属する。

室町時代(図14、図版5)

土壌SK88 土師器、瓦器、須恵器、焼締陶器、白磁、青磁、瓦が出土している。土師器皿(8～16)は白色系で、期新(15世紀末)に属する。第4面で検出した溝SD69などとの形態差は少ない。8～14は小型で口径7.7～8.4cm、高さ1.9～2.0cm、15は中型で口径9.4cm、高さ2.3cm、16は大型で口径15.9cm、高さ3.0cmである。瓦器瓶子(17)は、口頸部分が残存する。口径4.0cm、残存高は3.5cmである。青磁椀(18)は口径11.0cm、高さ4.6cmあり、1/4残存。輸入品である。

第3面下層包含層 土師器、須恵器、焼締陶器、白磁が出土している。期新(15世紀末)に属する。土師器皿(19～28)では、19～26が小型で口径7.3～9.0cm、高さ1.5～2.1cm、27は中型で口径9.8cm、高さ2.4cm、28は大型で口径14.4cm、高さ3.1cmである。

土壌SK68 土師器、須恵器、施釉陶器、焼締陶器、白磁が出土している。期新(15世紀末)に属する。土師器皿(29～33)のうち、29・30は小型で口径8.0～8.2cm、高さ1.8～1.9cm、31は中型で口径10.0cm、高さ2.2cm、32・33は大型で口径14.9～15.4cm、高さ2.7cmである。

溝SD69 土師器、須恵器、施釉陶器、焼締陶器、青磁が出土している。期新(15世紀末)に

属する。土師器皿（34～36）のうち、34・35は小型で口径7.6～9.0cm、高さ1.2～2.2cm、36は大型で口径12.4cm、高さ2.3cmである。

土壌SK78 土師器、瓦器、須恵器、焼締陶器、青磁、白磁が出土している。期古（16世紀前葉）に属する。土師器皿（37・38）は大型で口径14.4～15.8cm、高さ3.1～2.1cmである。

江戸時代前期（図15、図版5）

井戸SE7 土師器、瓦器、施釉陶器、焼締陶器、白磁、青磁、染付、瓦、鉄製品などが出土している。江戸時代前期の期古（17世紀後半）に属する。土師器皿（39～49）のうち、小型のもの（39～41）は口径5.8～6.0cm、高さ1.2～1.5cm、中型のもの（42～44）は口径9.5～9.8cm、高さ1.8～1.9cm、大型のもの（45～49）は口径10.0～12.5cm、高さ1.8～2.0cmである。大型のものには内面に沈線がある。（50・51）は土師質土器の小壺である。50は口径3.3cm、高さ2.5cm、51は口径6.3cm、残存高3.0cmである。白磁椀（52）は口径10.7～11.5cm、高さ5.9cmである。施釉陶器椀（53）は口径12.9cm、高さ6.7cmである。瀬戸・美濃系の天目椀である。ほぼ完形で、底部内面は釉がすり減っている。焼締陶器搦鉢（54）は口径27.8cm、高さ13.8cmで、信楽産である。井戸の底部から出土した。17世紀前半のものである。

土壌SK15 土師器、施釉陶器、染付、磁器が出土している。期中～新に属する。土師器皿（55～60）は口径10.6～11.2cm、高さ1.9～2.5cmである。55・56・60には口縁部に煤が付いている。灯明皿に使用したものであろう。

土壌SK12（61～71）土師器、瓦器、白磁、焼締陶器、金属製品が出土している。期頃に属する。土師器（61～69）のうち、61～68は小型の皿で、口径5.0～5.8cm、高さ1.1～1.4cmに収まる。62と68の口縁部には煤が付着している。69は口径3.1cm、高さ0.9cmで、口縁部は20ヶ所の刻みを入れたミニチュアの輪花皿である。（70）は土師質土器の小壺である。口径3.5cm、高さ2.3cmである。焼締陶器甕（71）は底部径28.5cm、残存高22cmである。内外面に鉄泥を塗る。信楽産の

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
古墳時代	土師器甕	2箱	土師器3点、黒色土器1点、須恵器1点、灰釉陶器2点	1箱	0箱
平安時代	土師器・黒色土器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器				
鎌倉時代～室町時代	土師器・瓦器・須恵器・磁器・銭貨	6箱	土師器29点、瓦器1点、青磁1点、銭貨4点	3箱	2箱
江戸時代前期	土師器・磁器・焼締陶器・施釉陶器・骨製品・金属製品	16箱	土師器32点、施釉陶器1点、焼締陶器3点、白磁1点、骨製品1点、金属製品2点	3箱	12箱
江戸時代後期	土師器・磁器・焼締陶器・施釉陶器・染付・土製品・塩壺・ミニチュア・骨製品・金属製品・石製品・瓦・埴	21箱	土師器12点、陶器10点、花塩壺2点、白磁2点、染付10点、土製品3点、銭貨2点、角製品5点、金属製品8点、石製品1点	5箱	15箱
合計		45箱	137点（4箱）	12箱	29箱

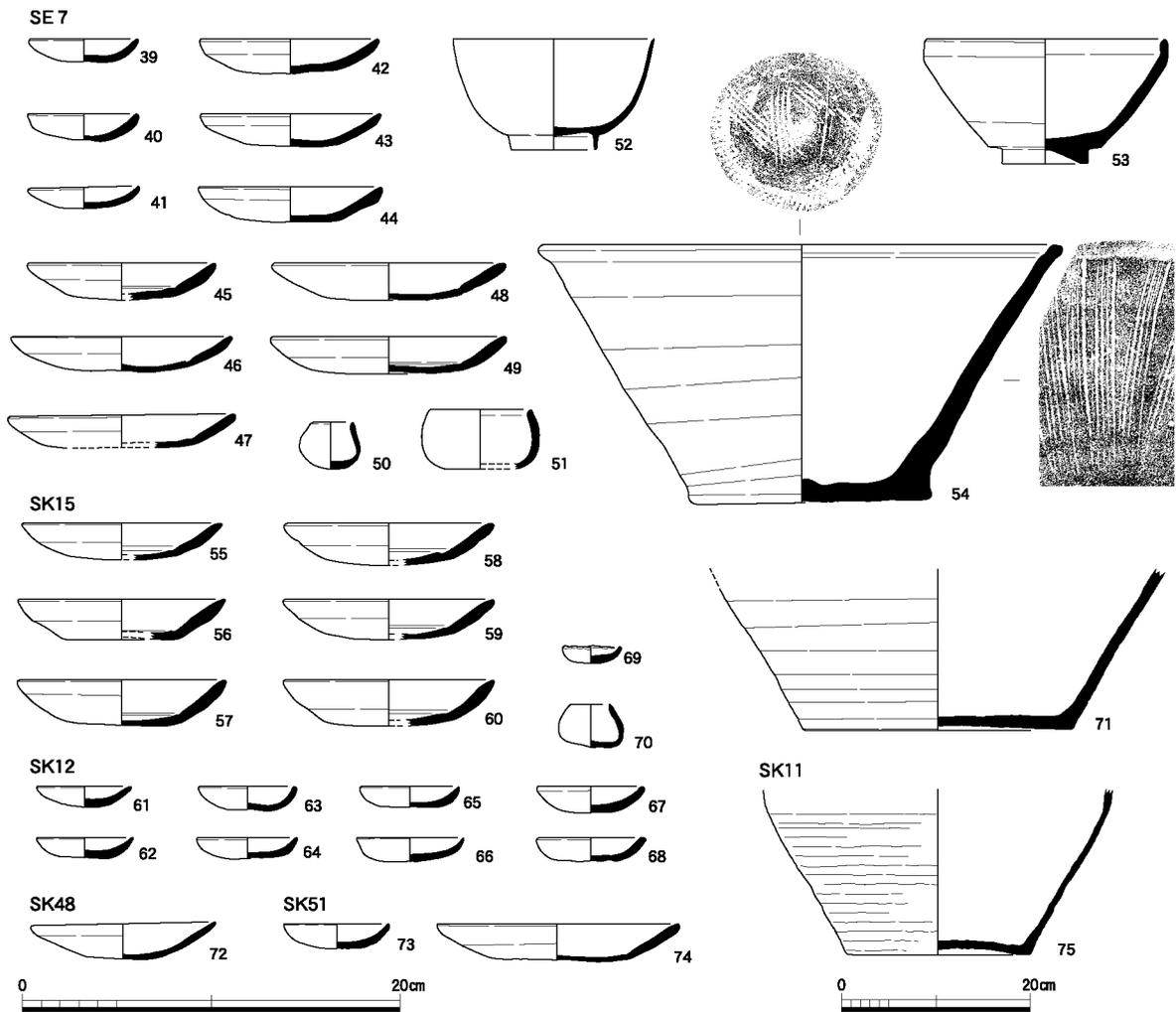


図15 江戸時代前期の土器類実測図（1：4、71・75のみ1：8）

甕である。

土壌SK48 土師器、灰釉陶器、瓦器、青磁、染付、施釉陶器、焼締陶器が出土している。期中頃に属する。土師器皿（72）は口径9.8cm、高さ2.0cmである。

土壌SK51 土師器、青磁、施釉陶器、染付、るつぼ、瓦が出土している。期新～期に属する。土師器皿（73）は口径5.6cm、高さ1.3cm、（74）は口径12.8cm、高さ2.1cm。口縁部に煤が付着している。

土壌SK11 土師器など小片の遺物が少量出土した。時期は不明確であるが、土壌SK12と同時期の期に属すると考える。焼締陶器甕（75）は底部径19.6cm、残存高25.5cmである。内外面に鉄泥を塗る。信楽産である。

江戸時代後期（図16、図版5）

室SX2 土師器、瓦器、青磁、施釉陶器、染付、焼締陶器、磁器、瓦、埴塼、鹿角、貝、金属製品、石製品が出土している。期新（18世紀末）に属する。土師器皿（76～81）には、口径5.1～5.6cm、高さ1.2～1.4cmの小型のもの（76～79）と、口径10.4～10.8cm、高さ2.1～2.2cmの大型のもの（80・81）がある。施釉陶器椀（82）は、体部上半を方形に作る椀で、一辺8.7cm、

高さ5.4cmである。京焼の椀である。外面に松の文様がある。施釉陶器（83）は口径6.9cm、高さ4.1cm、底面以外鉄釉がかかる仏飯器で、肥前磁器である。染付磁器椀（84）は口径10.8cm、高さ7.4cm、肥前系の椀で、外面に唐草文様がめぐる。北隣の土壌SK15出土のものと接合した。17世紀前半のものである。染付磁器椀（85）は小椀で、口径6.6cm、高さ2.9cm。1/2残存。外面に雨降文がある。肥前系である。染付磁器椀（86）は、口径8.7cm、高さ4.7cm。1/2残存。外面に松竹梅文がある。肥前系である。青花大皿（87）は、口径26.8cm、高さ4.2cm。1/8残存する。中国の漳州窯系磁器である。

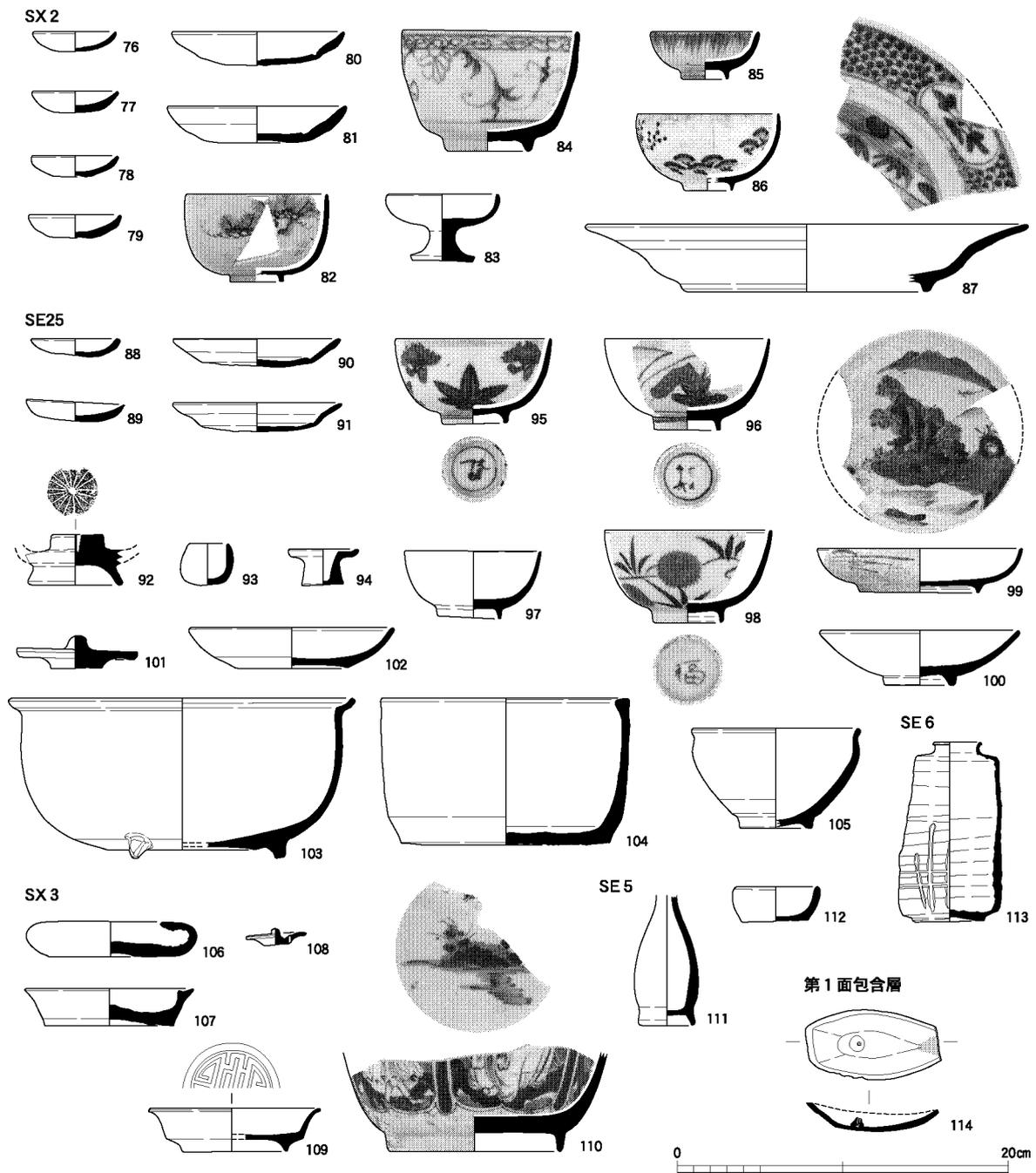


図16 江戸時代後期の土器類実測図（1：4）

井戸SE25 土師器、施釉陶器、染付、焼締陶器、青磁、瓦、埴、骨、貝、金属製品が出土している。 Ⅱ期に属する。土師器皿(88・89)は、小型で口径5.4~5.9cm、高さ1.2~1.3cm。土師器皿(90・91)は、大型で口径10.2~12.1cm、高さ1.8~2.1cm。88・90・91の口縁部には煤が付着している。(92)は土製品のミニチュアで茶臼を象ったものである。残存直径7cm、高さ3.1cmである。(93)は、口径3.2cm、高さ2.6cmの土師質土器小壺である。(94)は、土製品のミニチュアで高杯状の器である。染付磁器椀(95)は口径9.5cm、高さ5.2cm。肥前系の椀でコンニャク文で紅葉と菊の文様が4ヶ所に配置してあり、高台内には「大明年製」の銘がある。染付磁器椀(96)は口径10.0cm、高さ5.6cm。1/4残存。外面には草文、高台内には「大明年製」の銘がある。肥前系である。白磁椀(97)は口径8.3cm、高さ4.1cm。1/3残存。肥前系である。染付磁器椀(98)は口径10.1cm、高さ5.6cm。1/2残存する。外面に草花文を配し、高台内には「福」の銘がある。染付磁器皿(99)は口径10.1cm、高さ5.6cm。4/5残存。内面に山水文がある。染付磁器皿(100)は口径12.1cm、高さ3.4cmで1/2残存する。見込を蛇ノ目釉剥ぎにする。肥前系である。施釉陶器蓋(101)は口径7.3cm、高さ2.0cm、上面に褐釉のかかる急須の蓋である。施釉陶器灯明皿(102)は、口径12.4cm、高さ2.5cm、1/3残存する。内面と外面上部に暗緑黄色の釉がかかり、口縁部に煤が付着する。京都・信楽系である。施釉陶器鍋(103)は口径21.0cm、高さ9.8cm、2/5残存する。外部底面以外に、暗緑灰色の釉がかかる。底面は焦げたようで、黒く変色している。京都・信楽系である。施釉陶器鉢(104)は口径15.1cm、高さ8.9cm、1/4残存している。瀬戸・美濃系か。施釉陶器椀(105)は口径10.2cm、高さ6.1cm、1/4残存している。鉄釉のかかる天目椀で瀬戸・美濃系である。

SX3 施釉陶器、染付、焼締陶器、磁器、瓦が出土している。 Ⅲ期(19世紀)に属する。陶器(106)は花塩壺で、口径10.3cm、高さ2.2cm、底部を糸切りしている。陶器(107)も花塩壺である。口径10.2cm、高さ2.3cm。皿のようだが、蓋が付くものである。底部を糸切りしている。陶器蓋(108)は口径3.7cm、高さ1.0cm。つまみの脇に小さな穴がある。急須の蓋である。白磁皿(109)は口径10.4cm、高さ2.7cm、1/2残存している。瀬戸・美濃系の木型打ち込み成形の皿である。底部内面に中華模様が印刻されている。染付磁器鉢(110)は残存口径16cm、残存高6.5cmで、外面に象と南蛮人の文様を配す。肥前系である。

井戸SE5 土師器、施釉陶器、染付、焼締陶器、磁器、埴が出土している。 Ⅳ期新(19世紀)に属する。施釉陶器壺(111)は口径3.9cm、残存高8cmの小壺である。外面には高台以外に緑灰色の釉がかかる。京都・信楽系である。土師質土器鉢(112)は口径5.3cm、高さ11.0cm、いわゆるでんぼ型のものである。

井戸SE6 土師器、施釉陶器、釘と出土した遺物は少なく、時期は不明確である。施釉陶器茶入(113)は口径6.2cm、高さ11.0cm、体部の上1/3は褐色の釉が濃く、下2/3は暗緑黄色の釉がかかる。底部は糸切りをしている。丹波産と思われる。

第1面包含層 土製品(114)は長さ8.0cm、幅4.2cm、高さ1.4cm、舟形のミニチュアである。薄く透明釉がかかり、緑彩されている。第1面から出土した。

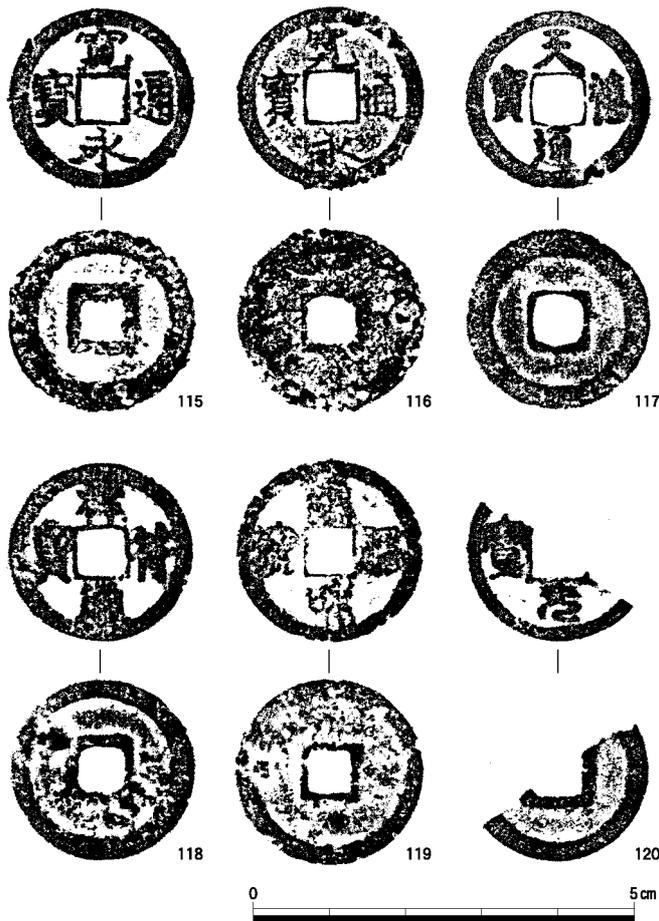


図17 銭貨拓影(1:1)

(3) その他の遺物

1) 銭貨(図17、図版6)

(115・116)は寛永通寶で、ともに井戸SE25から出土した。

(117)は天禧通寶で、土壙SK15から出土した。北宋1017年初鑄のものである。

(118)は祥符通寶で、室町時代の第3面包含層から出土した。北宋1009年初鑄のものである。

(119)は宣和通寶で、室町時代の第3面包含層から出土した。北宋1119年初鑄のものである。

(120)は破損しており、元寶の文字が残る。字体からみて宣和元寶(北宋1119年初鑄)、紹聖元寶(北宋1094年初鑄)の可能性はある。室町時代の溝SD60から出土した。

2) 骨・角製品(図18、図版6)

鹿角とその未製品の一部である。室SX2から出土した。(121・122)は角の先端部分で、121は最大径1.1cm、長さ4.5cm、122は最大径1.1cm、長さ2.4cmである。切断面には鋸引き痕と思われる線が残る。鹿の角を加工した後の端材と考える。同様のものが他に16本出土している。最長4.7cm、最短1.8cm、径は0.9~1.1cmで、同じく切断面に鋸引き痕の残るものがある。(123~125)は角を加工時の切り端と思われる。123は10面の面取りがある。径1.3cm、厚さ0.6cm、鋸引き痕がある。124は径1.1cm、厚さ0.75cm、鋸引き痕がある。125は最大径2.2cm、厚さ0.6cm、鹿角の外表面をとどめる。出土した中で最大の直径である。

竿秤(126) 竿秤の竿の一部である。直径約0.42~0.45cmで、残存長4.2cmである。円周上の外面に約60度間隔で、3条の目盛りが平行している。1目盛り0.092cmで5目盛り(0.46cm)ずつ区切るもの、0.090cmで10目盛り(0.90cm)ずつ区切るもの、0.147cmで10目盛り(1.47cm)ずつに区切るものがある。

3) 金属製品(図18、図版6)

釘(127~131) 鉄製で、井戸SE6から出土した。127・131は頭部まで残存するが、128~

130は頭部が欠損する。127は長さ8.0cm、131は長さ11.5cm。鉄芯の周囲には木質が付着する。127は縦方向のみの木質が付着する。131は頭部下1.7cmで木質繊維の方向が異なる。128～130も破損部で木質繊維の方向が異なり、131と同じ型式の釘とみられる。木質を含む幅は1.3～2.5cmある。合計10本出土した。

芯押え（132） 銅製の灯明の芯押さえで、井戸SE7から出土した。幅0.27cm、厚さ0.16cmの銅板を外径約3.5cmの円形に折り曲げ、さらに一端を上方に突出させたものである。突出部は0.8cm残存するが、先端は欠損している。平安京左京北辺四坊では、突出部の完存した製品が出土している。³⁾

匙状製品（133） 匙状を呈する真鍮製品である。井戸SE7から出土した。全長15cm、柄の部分は断面が半円形で、先端には切り込みを入れくびれを造り出す。匙状の部分は薄板造りで、中央に直径0.8cmの穴があく。穴の部分で製品の直径などを検査する器具ではないかと考えられる。

襖引手金具（134） 井戸SE25から出土した。引手金具は楕円形の槽状を呈する。上端は外に折り曲げ、湾曲する縁となる。側面の上下2方向には釘穴がある。槽状金具の外側には環状金具

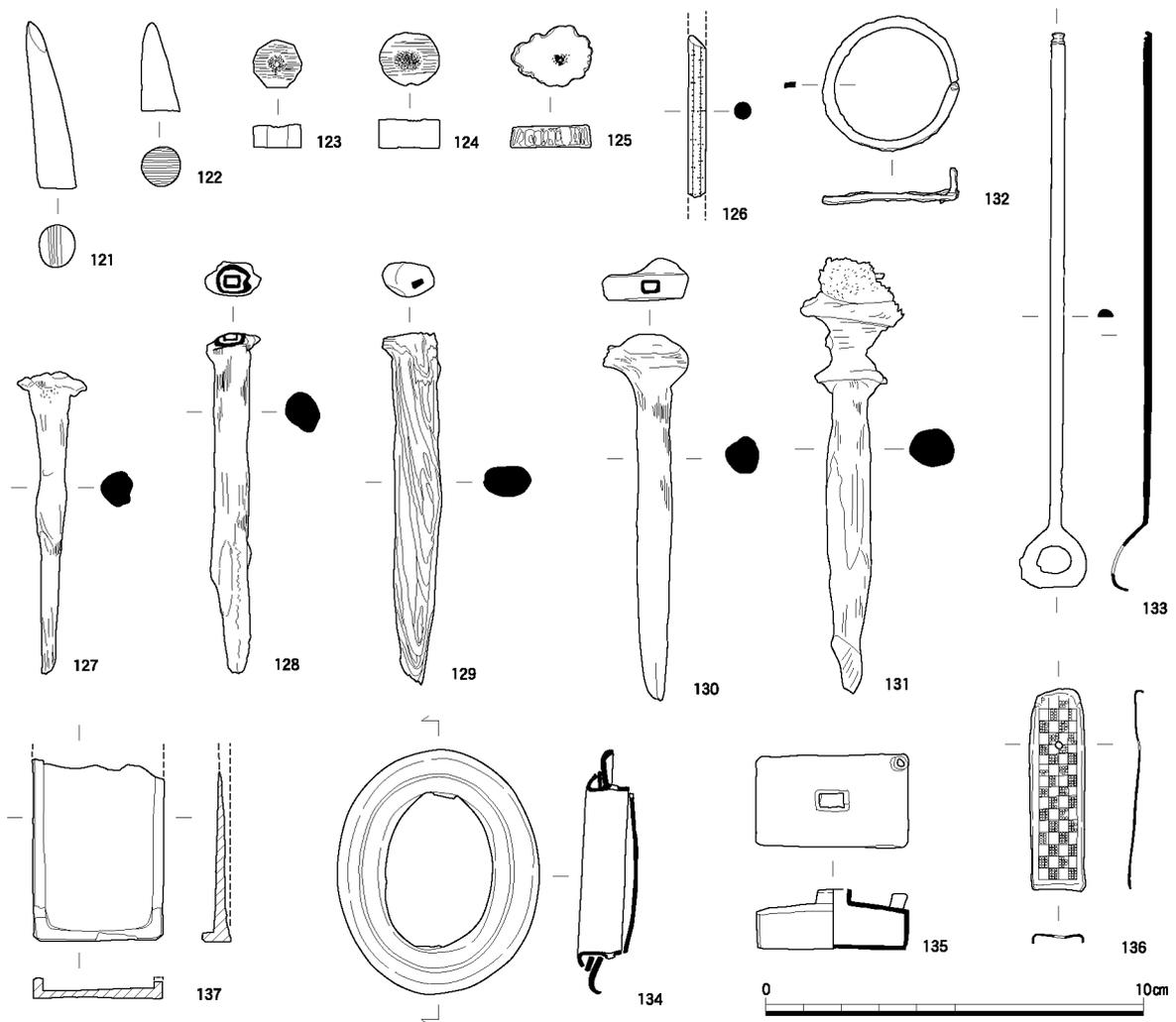


図18 その他の遺物実測図（1：2）

が二重にはめ込まれる。外側金具の直径は、長径6.5cm、短径5.5cmである。銅製。平安京左京北辺四坊でも類似品が出土している⁴⁾。

水滴(135) 銅製の水滴で、井戸SE25から出土した。長方形の箱形を呈する。長辺4.1cm、短辺2.5cm、高さ1.6cmで、天井部はふくらみをもち、中央部に0.3×0.6cmの注水口を開け、一隅には内径0.2cmの注ぎ口を設ける。平安京左京北辺四坊でも同様の製品が報告されている⁵⁾。

飾金具(136) 真鍮製の飾金具である。室SX2の最下層から出土した。厚さ約0.08cmの真鍮板で、四辺すべてを内側に0.2cmほど折り曲げる。全長5.4cm、幅1.4cmあり、一端は切り込みを入れて隅丸に仕上げる。表面は四周に縁をとり、4×16の方形区画を設け、無地の部分と魚々子打ち部分を市松模様に配置している。魚々子は3個一組で4段が正確に刻印されている。端より1.5cmの位置に目釘穴が1つある。

4) 石製品(図18、図版6)

硯(137) 粘板岩製の硯である。井戸SE25から出土した。下部の大半、並びに海の部分は破損している。残存長4.8cm、幅3.5cm、残存高0.7cmである。隅部を小さく面取りする。陸部は平滑であり、使用痕が認められる。

5. ま と め

今回の調査では江戸時代後期、江戸時代前期、室町時代、平安時代、古墳時代の5時期の遺構を5面にわたって調査した。

古墳時代の遺物は少なかったが、調査区南西の1次調査では古墳時代の流路から多くの遺物が出土し、2次調査でも検出している。さらに御池通南の2001年発掘調査¹⁾では、湿地状堆積の落ち込みから、完形の須恵器や土師器が出土している。今回検出した流路SD152の南側には4基の杭跡状の遺構が見られ、近くに集落の存在をうかがわせる。

平安時代には2層の遺構面を確認したが、後世の削平を受け、残存状況は悪い。遺構は20基ほどで、遺物は少なく小片が多い。柱穴状の遺構を検出したが、建物跡には復元できなかった。しかし、平安時代末期には、井戸SE86が存在することから、これを使い生活する人々の建物があったものと考えられる。

鎌倉時代の遺構・遺物の検出密度は低い。遺構は削平を受けたとしても、遺物の出土量が少ないことから、平安時代に比べると宅地の利用度が低かったのではないかと考えられる。

室町時代の遺構・遺物の検出密度は高く、溝SD60・69、南北柱列(柱穴Pit61・62・76・65)、土塙SK68・88など多くの遺構・遺物が出土した。この密度の高さは、室町時代になって、多くの人々が生活するようになり、宅地の利用度が高くなったためと考えられる。

このうち南北溝SD60と南北柱列(柱穴Pit61・62・76・65)は、平安京の宅地区分制度「四行八門⁶⁾」の西三行と西四行の境界線から、南北溝SD60は西へ1m、南北柱列は西へ3mに位置する

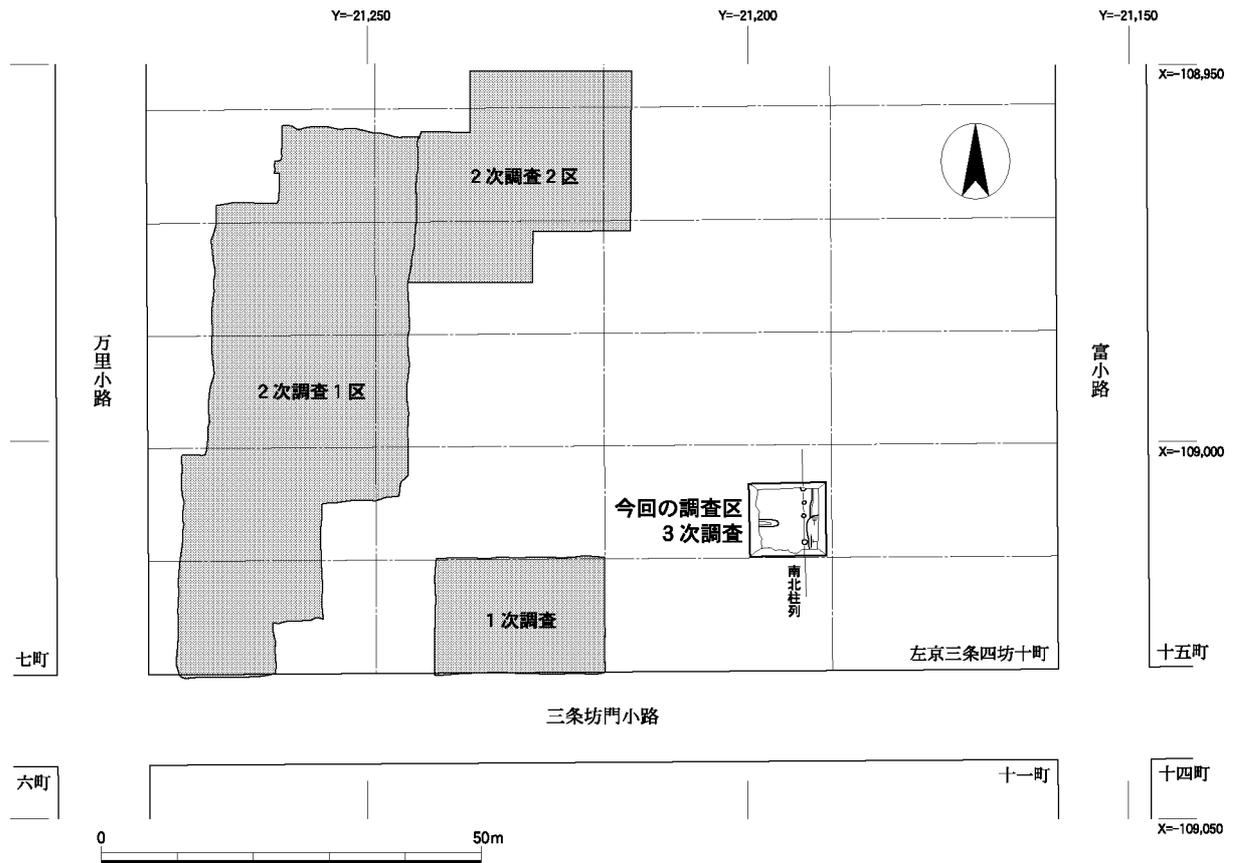


図19 調査位置図と四行八門推定線（1：1,000）

（図19）。調査地は、平安京左京三条四坊十町の中で西三行北七門に位置しており、南北方向の境界は、平安時代の四行八門をほぼ踏襲していることがわかる。この南北柱列は宅地境と考えられ、この柵列部分は小高く残っており、その境界線が江戸時代には、現在の富小路通になったと考えられる。

江戸時代、京都の町家は間口がせまく奥行が長いという特徴から、敷地の奥に井戸や室や土蔵があるのが一般的である。したがって、検出した室SX 2や井戸SE 5～7が富小路に近い位置にあることから、調査地の宅地は東面の富小路に面さず、南面の三條坊門小路に面していた可能性が高い。

ところで、調査地北東270mにおける1991年の立会調査⁷⁾では牛や馬の中手骨・中足骨を用いた未製品や端材が多量に出土している。一方、調査地の町内には角細工を生業としている店の存在が、元禄時代の『京独案内手引集』に記載されている。また、江戸時代の1685年（貞享2年）刊行の『京羽二重』には、「三條坊門通（御池通）とみのかうじ（富小路）に目貫小柄類」の店などと記述がある。今回の調査地から出土した遺物には、多数の角の先端部分の切り落とし、あるいは角の芯の海綿状部分の切り落としや加工品など多くあり、江戸時代後期には前記店と関係のある骨細工の工房の存在が考えられる。

註

- 1) 『平安京左京三条四坊十一町 - コスモシティ御池富小路新築に伴う調査 - 』 古代文化調査会
2002年
- 2) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 (財)京
都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 3) 『平安京左京北辺四坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第22冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所
2004年 - 第2分冊 (公家町) - 図版573
- 4) 3) に同じ - 第2分冊 (公家町) - 図版577
- 5) 3) に同じ - 第2分冊 (公家町) - 図版573
- 6) 『四行八門』とは、平安京町割りの制度で、宅地の1町(一辺40丈・約120m四方)を東西に4分割、
南北を8分割に細分する制度。これによってできる東西に長い区画(32分の1町)を一戸主(約
450㎡・約136坪)と呼び、宅地の最小単位とした。その宅地を朱雀大路(現在の千本通)から東側
は西から西一行・西二行・西三行・西四行、西側は東から東一行～東四行、北から北一門・北二
門・北三門・北四門・北五門・北六門・北七門・北八門とした。
- 7) 竜子正彦「平安京左京三条四坊(91HL38)」『京都市内遺跡立会調査概報』平成3年度 京都市文化
観光局 1992年

圖 版

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょうさきょうさんじょうしぼうじゅっちょうあと							
書名	平安京左京三条四坊十町跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報							
シリーズ番号	2004-4							
編著者名	尾藤德行							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2004年9月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうあと 平安京跡・ からすまおいけいせき 烏丸御池遺跡	きょうとしなかげょうく 京都市中京区 おいけどおりとみのこうじ 御池通富小路 にしいるひがしほちまんちょう 西入東八幡町	26100	464	35度 00分 29秒	135度 46分 04秒	2004年5月 21日～2004 年7月9日	100㎡	消防用 防火槽 設置工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
平安京跡	都城	古墳時代	流路・杭跡	土師器				
烏丸御池遺跡	集落跡	平安時代	井戸・土壇・柱穴	土師器・黒色土器・ 須恵器・灰釉陶器・ 緑釉陶器				
		室町時代	溝・柱列・土壇	土師器・瓦器・須 恵器・磁器・銭貨				
		江戸時代前期	井戸・土壇・石組	土師器・磁器・焼 締陶器・施釉陶器・ 骨製品・金属製品				
		江戸時代後期	井戸・室・土壇・ 柱穴	土師器・磁器・焼 締陶器・施釉陶器・ 染付・土製品・骨 製品・金属製品・ 石製品・瓦・埴				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004-4

平安京左京三条四坊十町跡

発行日 2004年9月30日

編集発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 075-256-0961